

臨終図巻

ドクター和の

ニッポン



長尾和宏(ながお・かずひろ)
医学博士。公益財団法人日本
尊厳死協会副理事長としてリビ
ング・ウィルの啓発を行う。映画
『痛くない死に方』『けったいな
町医者』をはじめ出版や配信な
どさまざまなメディアで長年の
町医者経験を活かした医療情報
を発信する傍ら、ときどき音楽
ライブも。

終活の末に残った「夫婦」という関係

コロナになる以前は、尊厳死や終末期のことを話してほしいと、全国各地から講演会の依頼が年に何十本もありました。日本尊厳死協会の副理事長を拝命しているの、休日を返上し東奔西走していましたが、どの会場に出かけても、同じ現象が起きていました。会場の7~8割が女性なのです。長尾は女性ファンが多いことを自慢しているのって？

いえいえ、そうではありません。「死」がテーマの講演に、男性はあまり足を運んでくれないのです。

「今日は夫と一緒に来る予定だったのですが、死の話なんか聞きたくないよって逃げられました…」なんて女性から声をかけられることもよくあります。

他の国がどうなのかはわかりませんが、日本においては、死生観にも



ジェンダーギャップが存在しているように男性のほうが死を考えることを拒否する傾向にあります。「俺はもういつ死んだっていい」と嘯(うそぶ)いているものの、「そろそろ終活しましょう」と妻に言われると、「冗談じゃないよ」と怒り出す

夫も珍しくありません。そんななか、この人の終活は完璧だったようです。

俳優の中尾彬さんが、5月16日に東京都内の自宅で死去されました。享年81。死因は、心不全との発表です。

「今年に入って足腰が悪く体力も落ちて、医師の訪問を受けながら、本人の意思により、自宅でゆっくり休んでおりました(中略)。15日に容態が急変し、16日の夜中に自宅で私と二人の時に、とても穏やかに本当に眠るように息を引き取りました」

中尾彬さんと池波志乃さん夫妻は、2018年に『終活夫婦』(講談社刊)という本を出版しています。夫婦の終活の一部始終を、ふたりの視点で書かれたとても貴重な一冊です。本書によれば、ご夫婦が終活を

しようと考えたのは、06年に志乃さんが「フィッシャー症候群」という難病に、翌07年には彬さんが「急性肺炎及び横紋筋融解症」を発症し、生死をさまよったことが大きかったようです。そこから夫婦で話し合い、遺書を作成し、お墓をつくり、沖縄と千葉のセカンドハウスを処分。その後も、周囲のモノをどんどん整理していきました。

本を読んでいて気が付くのは、お二人が、悲壮感を漂わせずに、とても楽しみながら、モノをどんどん片付けていっていること。そして「彬も私も、葬式はもちろん、延命治療もいらないと思っています」と志乃さんは書いています。さらに彬さんは、友人や仕事仲間など人間関係の断捨離まで始めていたようです。そして最後に残ったのは、夫婦という関係…死生観を語り合えた先に、男と女の新しい形があるのかもしれない。

358 俳優 中尾彬